
MY・ウィークポイント

佐藤 志雄

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

MY・ウィークポイント

【Nコード】

N8290X

【作者名】

佐藤 志雄

【あらすじ】

突然、神界の犯罪者によって殺された少年、市原望は、いちはらのぞむ地球の管理者を名乗る青年によって『魔法少女リリカルなのは』の世界へ転生させてもらえることになった。

「魔法……少女？ 俺の苦手分野じゃねえか！」

そんな少年が苦労して生きていく物語です。

注 この小説はチート・オリ主最強成分が含まれています。それらに不快感を覚える方は閲覧注意です。

プロローグ（前書き）

IS 操縦始めました。

初めまして、佐藤志雄です。

これからの予告編みたいな感じですので、生暖かい目で見てください。

それではどうぞ！

ブローグ

「おい！ 起きろ！」

誰だよ。俺の安らかな眠りを妨げるのは。

俺は夜中までIS見てて眠いのだ。

そして、明日は期末テストという名の拷問が待ってるんだからせめて、楽しい夢でも見させてくたせえ。

「ほう。楽しい夢が見たいか？ ならば……死ぬがいいっ！！」

直後、グツ！ という音と共に、硬く、物凄く重い円柱状の物が俺の鳩尾にめり込んだ。

「おゴッ!？」

肋骨は粉碎され、内臓は床に叩きつけられたトマトのように潰れ、口からはどす黒い血液の塊を吐き出す。

俺の寝ていたベッドはその衝撃に耐え切れず、底が割れ、木っ端微塵に真っ二つになった。

「ぐ……ううっ」

そして、俺が最後に見たのは、右手に血塗れの白銀のハンマーを持って口元を吊り上げている、男だった。

「って、なんでじゃあああああ！！！」

「おっ、やっと起きたか」

俺は叫びながら起き上がる。

そして目を開けると、そこは真っ白な空間だった……。

って訳でもなく。いつもの俺の部屋だった。

しかし、いつもと違うところが三点ほどある。

一つ目、俺は今浮いている。

周りの空氣的にはなく、本当に空飛んでるっていう意味で。

二つ目、目の前には真っ赤で原型を留めていない、恐らく人間であつた物が転がっていること。

三つ目、俺のさっきの叫びに反応したのは誰だ？

「あえて、一つ目の疑問から言つてやろう！ 何で俺は浮いてるんだ！？ あれか？ 魔法とかいうファンタジックな代物か！？ 次にあのスプラッタな人間だった物はなんだ！？ ってかあれ俺だよな！？ そしててめえは誰だあああああ！！！」

「ならば僕もあえて一つ目の質問から答えてあげよう！ 浮いているのは君が死んだからだ！ 魔法ではない！ そう、あのスプラッタな人間だった物は間違いなく君だ！！ そして僕はこの世界、地球の管理者だ！！！」

俺とこの地球の管理者と名乗る同い年ぐらいの青年は肩で息をし

ながら落ち着きを取り戻していく。

しかし、自分のグロイ死体を見ても何も思わないなんてな。あれかな？ もう死んだからかな。

「ゼエツ、ゼエツ……。そうか俺は死んだか……。一瞬過ぎて痛みなんて感じなかったな。それで？ 管理者つてのが俺に何か用か？」

「はあ、はあ……。飲み込みが早くて助かる。それとすまなかった。お前を殺した奴は僕達の世界、いわゆる神界で指名手配中の凶悪犯罪者だ。そいつを捕縛して処刑するのが僕の仕事なんだけど、運悪く……。ね？」

「俺が巻き込まれた……と」

なんて俺は不幸なんだろうか。日ごろの行いも悪くは無かったはず。

はっ！？ あれか？ 仏壇にお供えするはずだったお饅頭を食っちゃったからか！？

「本当にすまなかった。全てはこちらの責任だ、許してくれとはいわない。だけど少しはお詫びをしたい」

管理者が申し訳なさそうに言う。

ん？ お詫び？

「というと？」

「君を別世界へ転生させる」

「はい？」

突然の生き返らせてくれる宣言。

俺はてつきり天国で豊かに暮らせるくらいだと思ってたんだが。

「生き返らせてくれるのか？」

管理者は頷き、口を開く。

「だけど、さっきも言った通り君の居た世界ではない。そうしてしまつと色々問題が発生するんでね」

「別世界か……」

別世界。

それはどんな所なのだろうか。

自分の居た地球みたいに文明が発達しているのか。

はたまた中世ヨーロッパみたいな世界に行ってしまうのか。

どっちにしろ生き返れるのなら何処でもいいや。

ちゃんとした家族がいる世界にいけるなら。

「ちなみに転生する世界は物語の平行世界。その中の『魔法少女リリカルなのは』の世界に、君は転生する」

「魔法……少女……だと」

魔法少女。

かつて、そのジャンルのアニメが好きな友人——いやここはあえてオタクYと言っておこう——がいた。そのオタクYに半ば強引に『魔法少女まどか マギカ』なる魔法少女ものアニメを全話見させられ……それ以降、魔法少女ものアニメが超苦手になってしまった

という、いわゆるトラウマだ。

なんとも豆腐メンタルな人間である。どっかのママさんもびつくりだ。

そして変わりにロボットもののアニメが俺は好きだ。

その中でもISは最高だね。特に銀の福音がカッコいい。シルバリオ・ゴスベル

そんな訳で魔法少女ものが苦手な俺には由々しき事態だ。

あんなくっそ重いストーリーを生で見なくちゃならないなんて…

…俺のメンタルはもうゼロよ！ 状態になる。

注 この主人公は魔法少女もののアニメ全てをハートフルボッコストーリーだと勘違いしています。

「大丈夫大丈夫。その世界そんなに重々しくないから。でもその世界、ちょっと危険だから何か三つだけ好きな力をあげよう。その世界についての瞬間、怪物の胃の中とかかわいそ過ぎるし」

「あ、そうなの？ てか、どんだけ危ねえんだよ。その世界」

とか言いつつも、その力とやらを考えている。

「……よし、決めた。まず俺にISの銀の福音をくれ。ちゃんと俺にも動かせるように。二つ目は、篠ノ之束以上の技術。IS整備できなかつたらまずいし。三つ目はそれなりの魔力で」

「先の二つは了解した。でもそれなりの魔力とは、具体的にどれくらいだ？」

「そつだな、そこらの怪物には負けなくらいのかな」

「了解した。まあSくらいでいいだろう」

その基準は分からないが、なにやら俺の予想以上のが来そうだ。

そして管理者は右手を挙げ、パチンと指を鳴らした。

すると突然俺の頭上に禍々しい、いかにも、異空間に繋がってま
すよ！ とでも言いたげなワームホールがあった。

「ぬほああっ!？」

変な奇声を発する俺などお構いなしに、そのワームホールはすごい勢いで俺を吸い込んだ。

「さて、僕はいつもの仕事に戻るか」

管理者がなにか呟いたような気がするが俺にはまったく聞き取れ
なかった。

プロローグ（後書き）

感想待っております。

第一話 突然の……（前書き）

やっと第一話投稿。

11月1日にテストとかがありえねえ……

その5日後には模試とかどんだけ……

時間軸おっそろしく飛びます、すみません。

ではどうぞ。

第一話 突然の……

俺こと市原望いちハラのぞむが転生してから6年が経った。

いや転生と言うと語弊があるかもしれない。
トリップしたと言うべきだろうか。

俺は9歳にまで若返り、辺り一面雪が降り積もる銀世界へと放りこまれた。

着ていたものは生憎、殺されたときの血まみれジャージ。
サイズもぶかぶかでとても寒さを凌げる代物じゃなかった。

その時、ロストロギアを搜索していた時空管理局に保護され、保護施設に厄介になった。

ちなみにその時分かったことなんだが、どうやら俺は魔力を多く持っていて外部に放出できない体質らしい。ぶっちゃけ魔力を貰った意味が無かった。

2年ほどして保護施設を去り、篠ノ之東以上の技術力と頭脳を活かして、魔導師が魔法を使う際の補助に使うデバイスを作成・管理できるデバイスマイスターの資格を取った。

その後、航空隊のデバイス担当メカニクとして研修する傍ら、
シルバリオ・ゴスベル
銀の福音をデバイス化。魔法発動を補助することによってやっと魔法が使えるようになった。感無量です。

あと、これは俺も驚いたが。ある日、銀の福音に展開装甲を搭載しようと思いい立ち、早速作ってみたら……。なんと、展開装甲が魔力版零落白夜の性質を持つちゃいました。

簡単に言つと、展開装甲が、強力なバリアだろうがシールドだろ

うがバリアジャケットだろうが魔力を使っていれば問答無用で無効化する脅威の武器に変貌したということ。用は魔力無効化武器。それはあの、管理局屈指の殲滅力を誇る魔導砲、アルカンシエルも例外ではない。

こんなものを人相手に使うわけには行かず、通常はオフにしている。

今思えばなんで零落白夜なんて発現したんだ？

まあ俺が、ISの原作に登場する白式の機体をイメージしながら調整していったからだと思うが。謎だ。

そんなこんなで少年時代はあっという間に過ぎて行き、今は25歳です。

突然のキングクリムゾンだが、それほど特筆することがなかったから許してほしい。

そりゃ、大きい事件は二つほどあったが、それらも恐らくこの物語の主人公の手によって終結した。9歳の少女達が解決とかまずありえない、少なくとも俺には無理。

そのとき俺もどこかで物語に介入しているかもしれないと思ったが気にしないことにした。そもそも管理局に入った時点で介入するようなものだろう。

そして現在。俺は次元航行艦クラウドディアの艦長室にいる。

「新しい部隊への出向？」

「ああ。古代遺物管理部機動六課。八神はやて二等空佐が設立したロストロギアを専門に扱う部隊だ」

俺の言葉に答えたのはクロノ・ハラオウン。俺と同期で優秀な魔導師。今は執務官で提督の役職についており、この艦船クラウディアの艦長でもある。

「あの八神はやて二等空佐が部隊長を務める機動六課か。だったら俺が行かなくてもいいんじゃないか？ それに後見人にはお前や、リンディさん、騎士カリムの三人がついてるんだし、非公式だが伝説の三提督も協力すると言ってるんだろ？」

「そうなんだが、後見人というだけじゃ現場の状況を逐一把握するのが難しいからな。部隊の監視役としてお前に出向いてほしいんだ」

「だが地上部隊が黙ってないだろう。機動六課は唯でさえ過剰戦力なんだ。高町なのは一尉とお前の妹のフェイトちゃんでSランク魔導師が二人もいる。八神はやてに至ってはSSランクだぞ。副隊長もS-やAAA+なんだ。そこに俺が入ったら戦争起こせるレベルだぞ」

まあ俺一人でも十分戦争できるレベルなんだが。
それに、さっき言った三人が一気に俺にかかってきたとしても勝つ自身はある。魔力無効化できるし。

「それなら一応は対策をとってある」

「なに？」

「魔力ランクにリミッターを掛ける。そうすれば通常SSランクでもAランク程度まで抑えることが出来る。そしてこれを解除するにはそれぞれの上司の許可が必要になる」

「なるほど。それなら一応は戦力を抑えることが出来るな。俺も出力に制限は掛けてるから、公式ではS-になってるし。一応は大丈夫か」

「まあ。それでも地上部隊には不審がられるだろうけど、そこは俺達がなんとかするさ」

そう言いながら、クロノは置いてあったコーヒを啜る。
それにしても、何が目的なんだ？

ロストロギア関連の仕事は危険度が高いから多少は他の部隊より戦力が高くなるのは仕方ないが、機動六課は明らかに異常。無敵を通り越して異常だ。余程のことが無い限り負けは無いだろう。無論俺以外で、だが。

それに、いくら八神二佐といえど所詮は19歳の少女。まだ経験も浅い人物にこれほどの部隊を任せることが許可されるのか？

恐らく、最近発見されたロストロギア、レリックも関係しているんだろうが、他にももっと大きな何かが関係している可能性が高い。

色々考えていたが結局、これだという結論には辿り着かなかった。

その後クロノに、二人の子供のことをそこはかとなく自慢され、25歳で未だ独身の自分を呪いながら部屋に戻った。

第一話 突然の……（後書き）

ご都合主義MAX

なぜ零落白夜が発現したのか、それはただ出したかったからです（蹴
まあそんな訳は無くちゃんと理由はあります。一応（汗

感想待ってます。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8290x/>

MY・ウィークポイント

2011年10月29日20時11分発行